

ナイチンゲールの宗派は何だったのでしょうか？ 彼女の両親の家系はユニテリアンというプロテスタントの一派でしたが、父親が大叔父から遺産を相続する際のしきたりにより、一家はイングランド国教会に改宗しました。当時、上流階級の人びとの多くはイングランド国教会に属していたので、社交を重視した母親の意向でナイチンゲールも国教会に通っていました。しかし、彼女は国教会の教義に異議を感じるようになり、一時はカトリックへの改宗を試んでいます（結局、改宗は思いとどまりましたが）。

ナイチンゲールにとって重要だったのは、宗派ではなく、教会の権威や儀式、神への祈りでもなく、神の召命に応えるために行動することでした。彼女にとって神とは、善意に基づく「行為」の内に存在するものだったのです。「神の僕として、貧しい人びとの救済のために行動する」——これこそが、十七歳のときに神の声を聞いて以来、彼女が人生を捧げてきたものでした。

本書では、宗派を超えた「善きサマリア人」派だったナイチンゲールの宗教観について、考察します。

（編集部）

目次

フーレンス・ナイチンゲールと信仰

——宗派の壁を越えて近代看護の確立へ ● 徳永哲 001

クリミア看護婦人団の宗教的背景 ● 平尾真智子 045

ナイチンゲールの宗教観——神秘主義の影響と

アーサー・H・クラフとのかかわりを手がかりに ● 佐々木秀美 059

フランスの愛徳姉妹会とナイチンゲール ● 野口理恵 089

朝の思いを大切に——カイザースヴェルト「母の家」に学ぶ ● 眞壁伍郎

法則に向ける眼差し

——『思案への示唆／真理の探究』から読み解く思想 ● 大北全俊 115

「コラム」

十九世紀イギリスの宗教事情

——イングランド国教会とオックスフォード運動 ● 平尾真智子 023

聖ヨハネ看護修女会の奉仕活動 ● 平尾真智子 033

人の心を支える「食」 ● 伊藤幸史 129

フロレンス・ナイチンゲールと信仰

——宗派の壁を越えて近代看護の確立へ

徳永哲

十九世紀ロンドンにおける貧しい病人への看護活動の始まり

十九世紀になると、イギリスにはロンドンをはじめ各地に産業都市が出現した。その都市には様々な労働者が密集する巨大な貧困街ができていった。また、労働者人口は増加の一端をたどり、新しい階級、すなわち労働者階級へと発展し、従来の市民階級とは一線を画する独自の生活圏をもつようになった。

ロンドン東部には、そうした労働者の生活圏が広がっていた。その生活には貧困と不衛生がつきまとい、当時、疫病の温床とみなされるようにもなっていた。膨張する産業資本主義が生み落とした社会は、環境汚染、悪臭、疫病、売春などに満ちていた。しかも、その社会の底辺に生きる人びとは、救い難い状況の下で、政治や社会、さらには教会からも見捨てられていたのである。

そうした貧しい人たちに救いの手を差し伸べるべく活動を始めた人びとがいた。それは、ロンドン橋周辺の病院の医師をはじめとするプロテスタントの慈善婦人団体やカトリックの修道女であった。

一八二九年にイギリス国王ジョージ四世によってテムズ川の南側に創設されたロンドン・キングス・カレッジ（現在はロンドン・ユニバーシティ・カレッジと併合されてロンドン大学になっている）は、一八三九年にキングス・カレッジ病院を開き、救貧院およびその診療所を併設し

た。この病院はイングランド国教会★が設立したものであったが、教派を超えて貧しい病人に医療を提供する方法を模索した。また、バーモンジー貧困地域にあるガイ病院は、隣接するロンドン・キングス・カレッジと協力して、近代的医療に適した看護師の育成を始めた。

さらに、テムズ川北側のトラファルガー広場周辺で積極的に貧しい病人を引き受けたチャリング・クロス病院、医療の進歩に則った看護師採用を試みたミドルセックス病院（この病院は一八五四年にコレラ患者を受け入れ、ナイチンゲールは応援に行っている）、イギリスで最も古い伝統を誇る聖バーソロミュー病院（一三二三年に聖アウグスティノ会修道士が創設）などが貧しい人びとの病氣と闘う拠点となった。

イエス・キリストの行いに倣なまって行動で信仰を証あかしするプロテスタントの慈善婦人団体がロンドン各地に次々と生まれた。さらに、三百年近く続いた禁止令から解放されたカトリックはバーモンジー貧困地域に女子修道院を建て、貧しい病人の救済活動を始めた。

ディーコネス会の発足とガイ病院の看護実習制度

エリザベス・フライの救済活動

ロンドンで救済活動の先駆者的はたらきをしたのが、クエーカー教徒のエリザベス・フライであった。クエーカー教徒とは、「個人の言葉や行動にこそ神の力は現存する」という信

クリミア看護婦人団の宗教的背景

平尾 真智子

ナイチンゲールと宗教

ナイチンゲールの宗教的背景

フロレンス・ナイチンゲールの家は両親ともにプロテスタントの一派、ユニテリアン^{★1}の家系であった。しかし、父ウィリアムが大叔父から財産を相続する際、大地主の義務に伴い、両親はイングランド国教会の会員になった。このことは娘たちにも多少の影響を与えたが、この段階ではフロレンスはイングランド国教会との親和の外にいた。むしろ彼女は、両親を通じて知り合ったブンゼン男爵^{★2}やユリウス・フォン・モール^{★3}から多大な影響を受けた。

ナイチンゲールはまた、神秘主義^{★4}に引きつけられた。彼女はアピラの聖テレサ^{★5}のような神秘主義者の生活を研究し、一八四八年にはローマでトリニタ・デ・モンテイ女子修道院長の

★1 キリスト教の正統教義である三位一体論に反対して、神一人だけの神性を主張し、イエスの神性を否定する教派。神学思想としては、古代教会のアリウスや宗教改革時代のセルベトゥス、ソッツィイーニなどによって主張されていたが、教派としては十八〜十九世紀にかけてイングランドとアメリカで別々に成立した。

★2 Christian Karl Josias von Bunsen (1791-1860) ドイツの神学者、エジプト学者。プロシア大使としてイギリス在任時にナイチンゲール家と親交をもった。一八五七年に男爵位を授けられた。

★3 Julius von Mohl (1800-76) ドイツの東洋学者。妻のメアリーはパリの文芸サロンの主宰者で、夫妻共にナイチンゲールの親しい友人であった。

★4 信者と神との内密な合一体験とそれに結びつけられた教説を意味する。神秘家とは、秘儀を伝授された者、秘儀にかかわる者。